

### <研究ノート>全集編集余話

中丸, 宣明

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

88

(開始ページ / Start Page)

2

(終了ページ / End Page)

6

(発行年 / Year)

2013-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010241>

〈研究ノート〉

## 全集編集余話

かさなるときはかさなるもので、この春から五月にかけて、私がつざつた個人全集が二冊刊行された。「円朝全集 第三卷」(三月、岩波書店)と『山田美妙集 第五卷』(五月、臨川書店)である。いまこの小文を「全集編集余話」と名づけたが、考えてみれば、私のこの二全集への関わり方は、「編集」と名乗るにはおこがましいものではある。それぞれ『円朝全集』は、倉田喜弘・清水康行・十川信介・延広真治、『山田美妙集』は、青木稔弥・須田千里・谷川恵一・十川信介・中川成美・宗像和重・山田俊治といった「編集委員」諸氏の編集にかかるものである。むしろ、その「方針」を是とし、自分のものとして本文作成や注解等の作業に従ったわけである。またその作業も、「超」が付くといつてよいほど有能な編集者の協力なくしてはならなかったが、この二つの全集に関わり仕事をした私自身の感想も感慨も少くはない。かねて論文執筆を求められていた本誌に、それらを記して責をふさぐつもりであったが、まさに

書き始めようとしたその時、学会誌『日本近代文学』(五月、88集)の最新号がもたらされ、そこに『山田美妙集』の編者の一人である須田千里による「校訂の実際——臨川書店版『山田美妙集』第三巻を中心に——」が掲載されていることを発見した。簡にして要を得た本集の発刊に至る経緯や「校訂の実際」が子細に述べられていた。巻は違うもののそれらは私の予定していたものと多くかさなる内容を持ったものだったし、私の考えていたものより遙かに周到のように思えた。また、『円朝全集』に関しては、すでに私も「注釈余滴——円朝の声——」(『日本文学』二〇二二年六月)を書き感想の一端は述べている。よって本稿では、それらと重複しないように、あえて脈絡を立てず、覚え書き風に、書き綴ることとした。

○

中丸 宣明

もとより『全集』の命は、本文である。もちろんその作者の「作品」を可能な限り集成し、日記や書簡、断簡零墨にいたるまで集録するという文字通り『全集』としての役割も重要であるが、信頼できる「本文」の提供もそれに劣らず重要である。

昨今の出版事情からすれば大部にわたる『全集』の出版は困難になってきている。『山田美妙集』であつて『山田美妙全集』でない理由も、そこら辺にあらう。勢い精選された「作品」の信頼できる本文を提供する役割が重きをなして来る。『鵬外歴史文学集』（岩波書店、一九九九年一月〜二〇〇二年七月）や『鵬外近代小説集』（岩波書店、二〇一二年一月〜二〇一三年三月）、あるいは『新編泉鏡花集』（岩波書店、二〇〇三年一月〜二〇〇六年一月）などの存在意義の存する所以であらう。もちろん、信頼できる本文といつても多様である。それは、いま挙げた鵬外の選集におけるように初版本によりつつも新字体を採用し、総ルビをバラルビにかえるなどの読みやすさへの配慮。それは極端な場合、角川書店版の『三遊亭円朝全集』（一九七五年五月〜一九七六年四月）におけるような新字体やルビの変更のみならず現代仮名遣への改変や会話をかっこでくり出す措置など、かなり大胆に読みやすさを追求した本文も存在する。それらは、「論文」に引用できるか否かはあくとして、一つの本文作成の姿勢には違いない。それが信頼を置けるか否かは、方針が明示され貫徹されているか、異同や修正箇所が明示されているか否かによる。まさに須田千里が

誰にも異論のない校訂など存在しまい。しかし、その校訂

方針、校訂過程の透明化が図られ、「解題」で明示されていれば、個々の読者が判断してそれぞれに本文を作成することが出来る（前掲論文）

と言うとおりなのである。出所不明な本文、それが一番困りものなのである。特に編者の「文学観（感）」により捏造された本文、それは粗雑に校訂された本文同様たちが悪い。そう古くもない編集にかかる『全集』にもそのような態度は見られるから、その手の文学趣味は根は深いといわざるを得ないが、生前の作家に近しい人が、その人になりかわつたかのように作つた本文などは、怪しげな本文には違いないのだが、そういった本文でも長く流通すると、流布本効果とも言うのだろうか、それが自然に思えてきてしまう、ということがある。これはこれで受容論（史）的観点から見れば興味深いことなのであるが、そのままでは信頼できる本文とはいいがたからう。

さて、本文作成の態度として、代表的なものが二つある。一つは初出主義、今ひとつは単行本主義とでも言うべきものである。初出主義とは最初に印刷された本文を尊重する立場で、それは初出以後の単行化や諸本集録本文は、「作品」本来のあり方から遠ざかっているという認識の上に立つものである。一方単行本主義は、著者生前に刊行された本文を重視するもので、そこには著者による訂正や修正があり、その作者の意思の尊重がある。『円朝全集』は前者、『山田美妙集』は後者ということになる。それは、それぞれの本文にとって適切な判断であつたように思われる。

円朝の「作品」は速記というかたちで発表される。その場合は単行本の場合もあれば、雑誌や新聞の場合もある。問題はその単行本である。それらは多く、いわゆる「ボール表紙本」として出版され、やがては「赤本」というごく大衆的な出版物として、貸本屋などを通じて流通した。紙型を用いたその本文は使われ、挿絵等の異同はあるものの、ほぼ同一である場合が多い。しかしその本文そのものは出所不明である。また、鈴木行三校訂による春陽堂版『円朝全集』（一九二六年五月〜一九二八年一月）の本文も、校訂方針や校訂過程は示されず、やはりこれも出所不明のものと言わざるをえない。ゆえに、今回の『円朝全集』が可能なかぎり初出本文に拠り、しっかりとした校訂が付されたことの意味は非常に重いのである。

一方『山田美妙集』は単行本主義であるが、今回私が担当した巻に収められた作品は初出のまま単行本も採録もされなかったものが多い。例外としては「可憐狂」と「三千号の配達夫」がある。前者は一八九七年四月に雑誌「新小説」に発表され、同年九月に単行本化されるが、雑誌掲載時の紙型を利用しているため本文の異同は少ない。またこの作品は一八九八年十二月刊の『美妙集』（春陽堂）に収録されるも異同は少ない。後者は一八九七年一月一日の「国民新聞」に掲載された後、一八九八年十二月刊の『言文一致 文例 参』に収録される。美妙自身が「原文より多少の改竄は加へられた」といつているように、異同が認められる。例としてその冒頭を掲げる（振り仮名は省略した）。初出は

「やい、こら、山の神、内膳寮の御準備はもうあらかた整つたか。何、まだだと？、人をつけ、もう何時だと思ふ、とうの昔日は暮れたぜ。」

「知つてますよ、うツとしい。」

「何だ、うツとしいと、勿体無い事を言ふなよ。忠告をする乃公の本意がわからないか。乃公に取ツちや此明治卅三年一月一日、すなはち国民新聞第三千号の空前の紀年日ぢやないか。早く大宴会を催したいと云ふのも至当ぢやないか。それだのになぞぐづウリく——して居るんだろ。手伝ひに頼んだ阿三ちゃんも。」

であるが、単行本では

「やい、こら、山の神、内膳寮の御準備はもうあらかた整へたか。なに、まだだと？ 嘘をつけ、もう何時だと思ふ、とうのむかし日は暮れたぜ。」

「なんだ、うつとしいと？ もつたい無い事を云ふなよ。

忠告をするおれの本意がわからないか。おれに取ツちや今日この明治三十三年一月一日、すなはち「国民新聞」第三千号の空前の記念日ぢやないか。はやく大宴会をもよほしたいと云ふのも至当ぢやないか。それだのになぞぐづウリく——して居るんだろ。手つだひに頼んだ阿三ちゃんも。」

となつて居る。やはり異同は少なしとはできない。また漢字をひらがなにするとこらやカタカナをひらがなにするというよう

な小さいと目される変更も、度重なると文章が与える印象を大きく変える。このような「改鼠」は、おそらくは単行化なり著作集収録なり、機会があればほかの作品にも付された可能性が十分にあるものとしなければなるまい。その意味でこの『五巻』の多くの収録作品は、ある意味「未完成」の不幸な作品といえるのかも知れない。もちろん、単行化されたか否かにかかわらず作品の本文は、しかるべき校訂を経た信頼すべき本文であることは言うまでもない。

## ○

しかし、『山田美妙集 第五巻』所収の初出しかない本文、就中新聞を初出とする本文、それは正直言つて校訂者泣かせのものであった。それは先ず第一に印刷の版面が悪く、またマイクロないしマイクロからのコピーも判読しにくいものであった(特に振り仮名や複雑な字形の漢字)ということである。東京大学の明治新聞雑誌文庫等で原紙の閲覧を経た上でも疑いを十分には晴らせず、文脈や他の箇所からの類推で校訂に当たったところもあつた。今ひとつの苦勞の種は、特に『山田美妙集』の場合初出本文自体の校正が必ずしも十分でなく、単純な誤植や文脈の乱れも散見されたことである。日刊の出版物であり一面や二面の記事とは違つて厳密性を要求されていなかったからなのかも知れない。しかし、新聞掲載の作品を底本とするということは、こじつけめくが、『円朝全集』と『山田美妙集』と共通する。『円朝全集』所収の『蝦夷錦古郷の家土産』の初

出は「やまと新聞」であつたが、『山田美妙集 第五巻』は一八九七年四月の「可憐狂」から一九〇〇年一月の「第二 逆雨順風」までの作品を集録するが、美妙は一八九七年春にやまと新聞社に入社し一八九九年春まで在社したと塩田良平作成の年譜(『山田美妙研究』一九三八年五月)にはある。『第五巻』には「やまと新聞」所載の「夕紅葉」(一八九七年一〇月?)を収録予定であつたが、原紙が見つからず見送りとなつた。残念なこととしなければならぬが、「やまと新聞」は一八八六年十月七日の創刊号に「松の操美人の生埋」を連載して以来、円朝の咄の速記の主要な「高座」となる。明治初期、新聞は政論中心の大新聞と世俗の事件や興味本位の記事を中心とした小新聞——それは江戸期の戯作の読者の受け皿ともなつていた——に分けられるが、一八八〇年代後半には小新聞は大新聞の性格を吸収しつつ、報道重視となり、現在のクオリティ・ペーパーの原型たる中新聞が形成してくる。「やまと新聞」はそういった状況の中、小新聞の後を襲うかたちで発刊されたものであつた。ゆえにその誌面は円朝の速記を載せるには似つかわしいものであつた。逆に言えば、十年余の時間を隔ててはいるが、小新聞的な性格は変わつていず、美妙にとつては落ち着きの悪い処であつたのかも知れない。一年内外で退社したらしく、作品も多く掲載したというわけではないようである。やがて、一八九九年九月には「国民新聞」に入社したことを、先の塩田良平制作の年譜は伝える。同紙に連載された「逆雨順風」「第二 逆雨順風」が『第五巻』には納められているが、他に短編小説や小品などを掲載するも、一九〇一年の秋には「国民新聞」か

らも退社している。それらの作品をみても、美妙にとって「国民新聞」も会心の作の発表の場とはならなかったようである。

○

さて最後にそれぞれの全集の収録作品について、簡単に感想めいたことを、書き付けておきたい。まずは『山田美妙集 第五巻』であるが、その収録作品が発表された時期の美妙は、塩田良平によれば、

若き美妙と老成の美妙とが、葛藤する過渡的時代といつてよい。すべてが試みであつた。彼の生活の本質へと進まうとする、魂の模索時代であつた（前掲書）

とされ、この期の代表作が『五巻』に集録の「可憐狂」であつたとされる。一八九〇年代の終りごろ、広津柳浪などによる深刻小説や川上眉山らによる観念小説が、時代の暗黒面に注目し、悲劇的な結末を持つ物語を用意した。それは日清戦後という、生活世界の大きな変化を受けた文学現象であつたが、「可憐狂」や「国民新聞」連載の「逆雨順風」（第二も含めて）のありようも、それらの動向に相即するものであつたには違いない。悲惨で抜き差しならない人間がそこには居る。しかし決定的な違いがそれら深刻小説や観念小説との間にある。それは何かといえば、深刻小説や観念小説は一編の「物語」なのである。つまり、発端があり事件があり結末があるものとなっている。しか

し、美妙の小説は終わらない。小説に結末を与えるのは偶然やとつてつけたような解決なのだ。小説に内在する「終わり」は存在していないように思う。深刻小説や観念小説と類縁性を持ちながらも「物語」であることを拒否する小説、それが何に由来するのか、その間に倉卒に答えることは、いまは差し控えたと思うが、美妙の文学を考える重要なヒントのような気がする。いずれにせよ、今は代表作が書かれた時期とは外れた時代の「作品」に注目することの重要性を確認しておきたい。一方の『円朝全集』も「牡丹燈籠」や「真景累ヶ淵」あるいは「塩原多助一代記」などの有名作に隠れた咄に改めて向き合う機会を作り出すことであろう。そこに新たな円朝の姿が浮かび上がってくるには違いない。と、文字通りとつてつけたような結論でこの小文の筆を置くことにする。

（なかまる のぶあき・本学教授）